

# 我が校、世界で何位？

## 距離置く乗る戦略二分

「世界の大学ランキング」への視線が熱い。英語圏の大学が有利になる傾向に反発して一定の距離を置く大学があれば、あえて流れに乗って躍進を目指す大学も。一方で世界ランキングを発表する英国の教育専門誌が今年、大学データの収集を担当する提携先と指標を変えたため、秋の順位発表にどう影響するか関係者の注目が集まる。どう向き合えばいいのか。  
(編集委員・山上浩一郎)

6月21日、東京国際フォーラムで開かれた「世界大学ランキングシンポ」の広い会場は、大学関係者らで満席状態だった。

主催は、学術情報リサーチ会社トムソン・ロイター。ランキングを発表する教育情報誌「タイムズ・ハイヤー・エデュケーション」(THE)の新たな提携先だ。

THEは、英国の教育情報会社QSと提携。論文の被引用数や情報発信などの指標で主に研究の質を評価し、04年からランキングを発表してきた。ノーベル賞やフィールズ賞受賞の卒業生の数などを重視する中国・上海交通大学のランキングと並んで有名で、世界中の研究者が大学選びの参考にして

■世界の大学ランキング  
(タイムズ・ハイヤー・エデュケーション-QS)

2009 ランク	2008 ランク	大学名
1	1	ハーバード
2	3	ケンブリッジ
3	2	エール
4	7	ユニバーシティカレッジロンドン
5	6	インペリアルカレッジロンドン
5	4	オックスフォード
7	8	シカゴ
8	12	プリンストン
9	9	マサチューセッツ工科大学
10	5	カリフォルニア工科大学
22	19	東京大学
25	25	京都大学
43	44	大阪大学
55	61	東京工業大学
92	120	名古屋大学
97	112	東北大学
142	214	慶応義塾大学
148	180	早稲田大学
155	158	九州大学
171	174	北海道大学
174	216	筑波大学

トムソン・ロイターとの提携で、評価の指標をこれまでの6から13に増やし、研究の質や大学の組織力、国際性、経済活動などを評価するという。

THEのフィル・ベイティ副編集長が新しい指標をスクリーンで示し、「これまでは英国とオーストラリアの大学が有利になるような偏重があった。もっと学者や研

## とらえ方はそれぞれ

こうした動きに対して冷静なのが早稲田大学だ。THEの09年ランキングで148位だった。世界ランキングが、研究中心の大学に有利なものに比べ、どちらかといえ

ば人文社会科学系の総合大学は不利といわれる。同大経営企画課は09年、「世界大学ランキングの意義とその可能性」という資料をまとめ、「ラン

キングは、ある指標からみた場合の順位であり、単純に大学の総合力をはかるものではないと考える」という基本方針を示した。

とはいえ、全否定はしていない。

①ある指標を用いた場合の強み、弱みがある程度、客観的にわかる②各指標のレベルアップを行うことは、教育研究の質の向上につながる③「結果を正しく分析し、課題を認識し、その対策を講ずることが重要である」とまとめた。さらに、グローバル戦略の打ち出し方なども示す。

一方で、97位の東北大学は、かなり積極的だ。井上明久総長は07

## 関心呼ぶきっかけに有効

世界の大学ランキングに詳しい米澤彰純・東北大准教授(教育学)の話 世界大学ランキングはまだ発展途上。どのような指標をどの程度重視して作られているか確認するのが大切な。現行の傾向は、理系中心の研究活動や国際性などに特化しており、英語圏の情報重視だ。とはいえ、順位は国際社会の一定の見方を反映していることも事実で、優秀な研究者らが大学選択で参考にしていく。

国内外の多くの大学が順位を上げようと様々な努力をしている以上、各大学は過小評価を避ける意味で積極的に情報を公開し、ランキングのあり方に意見を述べることも必要だ。大学が行う教育・研究その他の活動は、点数化できない複雑さがある。同時に社会からは大学の価値や意義が見えにくい。ランキングは、大学に関心をもってもらう最初の窓口としてはきわめて有効で、それを前提に各大学は国際社会への情報発信に努めるべきだ。

年に「井上プラン」を発表し、世界のトップ30の大学に入ることを目標に態勢を固める。

今年1月には「研究中心大学としての世界リーディング・ユニバーシティモデル」という報告をまとめた。このほか、「ランキング向上への提案」という資料もつくり、トップ10、トップ11〜20、ト

ップ21〜30の大学の特徴を分析。国際広報の充実による知名度の上昇、論文などの被引用度の高い分野・研究者をリクルート、質の高い外国人教員の獲得が必要としていた。

大学幹部は「戦略的に経営をするためにもブランド力を高めたい」と話す。

## 「日本発」の待望論も

海外発ではなく、日本発の世界ランキングへの待望論もある。

2007年末、東京・本郷の東京大学本部の一室に、有馬朗人・元東大総長や、小宮山宏総長(当時)らの大学学長や文部科学省幹部の数人が集まった。

現在の世界ランキングの指標となっていた論文の被引用数や情報発信は英語が前提。英語圏の大学ほど有利になる。それなら日本の大学の長所を知らせる日本発の世界大学ランキングをつくり一石を投じようという相談だった。

しかし、実現には、世界中のト

有馬氏はいまのランキングについて「どんな指標で評価しているか、冷静に見ればいい。アジアや途上国が弱いのは大学の歴史が欧米と比較にならないほど浅いのも背景にある。英語もまだ弱い。客観的に、参考として見てほしい」と話す。